

湘南ふくしネットワーク オンブズマン

SNET

発行日 2002年7月15日 発行責任者 高山直樹 湘南ふくしネットワークオンブズマン
〒253 0043 茅ヶ崎市元町7 17
電話・FAX 0467 85 6660 直通電話 090 4937 4904
ホームページ <http://www.npo-snet.com>



わたしたちの活動

湘南ふくしネットワークは、地域に根ざした権利擁護運動を展開していくことを目的として2001年5月より特定非営利活動法人(NPO)を取得し、活動を行っております。現在21名の福祉オンブズマンによって、県内19箇所の施設に、利用者の声を大切にしていくことをモットーに毎月の訪問を行っています。2002年度は、市民セミナー、市民オンブズマン養成基礎研修、地域支援研修、各地での講演などの活動も行っていきます。湘南地区から、全国へ。いっしょに権利擁護の運動を始めませんか？

第1回権利擁護についてのセミナー行われる

去る2002年2月17日、藤沢市民会館小ホールにて第1回権利擁護についてのセミナーが開催されました。本セミナーでは、権利擁護に関する制度、システム構築の課題、その実践方法の一つである「オンブズマン」について理解を深めることを目的としています。さらには多くの市民の方々が、わたしたちのオンブズマン活動に参画をしていただき、市民が主体となる福祉コミュニティをこの湘南の地から発信していきたいと切望しています。

【市民セミナー概要】

基調講演

講師 池田恵利子 氏(社団法人日本社会福祉士会副会長)

シンポジウム

(司会)相川 裕 氏(弁護士)

(シンポジスト)

山田 勝 氏(社会福祉法人翔の会湘南鬼瓦 利用者)

八尋英和 氏(特別養護老人ホーム カトレアホーム 利用者)

厚坂幸子 氏(横浜ふくしネットワーク・オンブズパーソン)

小川泰子 氏

(Sネット21代表・特別養護老人ホーム ラポール藤沢施設長)

江崎康子 氏

(施設利用者保護者・神奈川県自閉症児・者親の会連合会広報部長)



セミナーの様子



【セミナーにかけた思い】

オンブズマン 大石 剛一郎

97年夏から足掛け5年。施設訪問を中心に、訪問して話を聞く、活動について皆で話し合う、もちかけられた相談に対応して具体的に動く、施設に意見を言う、などの活動をしてきました。その間、職員の研修に関わったり、このようなセミナーで報告したりしたこともありました。

オンブズマン活動、権利擁護活動をやればやるほど、市民（一般化、参加、浸透、意識、ネットワーク、根付き）の重要性を思い知らされます。いろいろな面で、地の利の大きさを痛感してきました。

現代社会を見ると、「生産力の向上」と「経済成長」に支えられた「物質的な豊かさ」の追求に明け暮れるのはもう時代遅れだと思います。

生活の質をどのようにして高めるか、生きやすい社会をどのようにして作るか、がいろいろな場面で問われています。

市民による、福祉分野での権利擁護活動は言わば「情けは人のためならず」です。

人権は単なる「抽象理念」ではありません。社会的に弱い立場に立って、自分らしく主体的に生きることや人権さえも脅かされる、・・・それは「明日はわが身」です。自分のことは自分で守らなければいけません。お上まかせではいけません。それがセルフ・アドボカシーです。市民が自分で自分を守り、自分で自分を実現していく生活。私たちのオンブズマン活動を、そのための一つの方法として、提言したいと思います。それが私たちの5年間の活動の結論であり、同時に今後の活動のスタートです。

【セミナー感想】

茅ヶ崎地区自閉症児・者親の会
上杉桂子さん

2月17日のオンブズマン市民セミナーに参加した。会場は昨年と同様藤沢市民会館小ホールだが、それまで3回ほど続いたSネットセミナーとは明らかに雰囲気違った。参加者は私も含めて、地域ネット型オンブズマン活動の経過を、例年通り聞きに来た諸関係者が多かったように見えた。しかし、今回の対象は関係者だけではなく、ごく普通に街で暮らす人々なのだ。そんな中での基調講演「市民が創る福祉コミュニティをめざして」は、障害児の親という立場でありながら、いつの間にか当事者性を失いかけていた私に、一個人に立ち戻って考えるきっかけを与えてくれた。池田恵利子氏は、自身の否定された育ちからの脱却を障害児者の権利に重ね合わせて、人は誰でも自分の人生の主役になり続ける事、自分の人生は自分自身が引き受け、その事に尊厳を持つ事が、契約の福祉社会を主体的に生きる道だと力強く語った。それは初め、何を今更という気恥ずかしさで私を捕らえたが、上っ面のシステムや目新しい方向性にばかり、つい食指を働かせる自身の浅はかさを、十分に戒める警鐘となった。午後に行われたシンポジウムでは、利用者・オンブズマン・施設の三者間の発言に、それぞれの微妙な思いのニュアンスが感じられた。山田氏がかつて「この職員の言ってる事って、何かヘン。」と素朴に感じた子供心の確かさ。江崎氏の言う「親側の『これがいいだろう。』とする思いこみ」による

無意識の権利侵害。厚坂氏の所属するYネットの活動によって得られた物のひとつは、「問題を市民で共有して（社会化して）いかなければ、結局は根本的な解決はありえない。」という限界だった。どの立場の発言も、現場のリアリティに満ちていて、聞く側は嘆息と共に、権利を護り行使する事の困難さを思い知らされる。浮かび上がってくる障害児者に対するごく日常的な権利侵害の実態は、その日常性のゆえに、「気づかれない」「当たり前の事」「言えない」「仕方がない」の構図を呈し、そのまま、また日常の中に埋没していく。思えば、生まれて数十年、健常者として地域に暮らして、「権利侵害を受けた。」とはっきり確認できる事例が自分にどれほどあったらだろうか。今、障害のある人が身近に受けとるごくささいな権利侵害を、もしひとつでも自分が受けたら黙っていられるだろうか。それは、自分にとってあまりにも非日常の出来事で、我慢できるような事ではないだろう。権利が護られる中での非日常的な出来事が私たち健常者の権利侵害だとしたら、障害児者のそれは、全く逆である。昼休み、グレートタカシックバンドの若山氏は、音楽という自由な環境の中で、実に伸びやかな演奏を聴かせてくれた。こういった講演の中で語られる障害児者とは、全く別の世界にいる彼を感じることは心地よかった。どんな障害児者でも、どんなシーンであっても、演奏中の彼のような自由な人でいられるようにと願わずにはいられない。後半の質疑応答の中で取り上げられた、障害児者の育ちについてのシンポジウムの回答に、本人支援についての示唆があった。「普通」の市民感覚、そして「選び」の大切さである。小さい時から選びの機会を与えれば、それ



は何よりも強力なエンパワーとなるだろう。そこそが権利の入り口に置かれた道標ではないだろうか。私たち最も身近にいる人間や、それを取り巻く社会のひとりひとりが、まず彼らの選びを見つけ、支え、心とカタチで保障していかなければと、改めて痛感した一日であった。

「利用者の声に触れる場」

市川裕剛さん

今回のオンブズマンセミナーは、まさに利用者の生の声に触れる場でした。生の声には、利用者日々の営みに裏打ちされた真実があります。セミナー参加者の意見の中に、利用者の声を聞くことは、利用者のわがままを認めることではないか、と言う意見がありました。これに対して、利用者の山田さんは、「わがままかどうか、まずは話を聞いてから判断してほしい。」といった趣旨のことを言われました。このことは、そもそも、利用者からの発言すら困難であるという現状を表して

いると思います。私たちの想像以上に、利用者が声をあげるということは、困難な場面が多く、あきらめたり萎縮してしまうことが多いのだと考えられます。このような状況の中で、利用者が声をあげるということは、利用者にとってのエンパワメントだけではなく、聞いている私たちにとっても大きな意味があります。それは、利用者が何かを言うイコールわがまま、という図式の間違いに気づくだけではありません。利用者の存在を認めるという、価値観の大きな転換につながるものなのです。オンブズマンの活動は、利用者の権利擁護が基本となります。しかし、その活動の結果は利用者の権利擁護にとどまりません。それは、尊厳ある人間として、お互いを認めあえること、ノーマライゼーションを実現する力になるのです。オンブズマンセミナーが、利用者の発信の場として活かされるよう、今後の活躍を願っています。

上杉さん、市川さん、ご執筆いただきどうもありがとうございました。なお、市川さんにはその後今年度のオンブズマンになっていただきました。

わたしたちがオンブズマンです！



2002年度のオンブズマンを紹介します。年齢も職業もばらばらのわたしたちですが、同じ目的に向かって歩調を合わせていきたいと思っています。

高山 直樹（たかやま なおき）

東洋大学助教授、社会福祉士・1960年東京生まれ、藤沢育ち・専門分野は、障害者福祉論、社会福祉援助技術論・厚木精華園（知的障害者施設）オンブズマン・相模原市財産保全・管理サービス審査会副委員長・社会福祉士会成年後見制度研究会委員・全日本手をつなぐ育成会権利擁護委員会委員。

5年間のオンブズマン活動は、多くの貴重な経験と出会いがあった。特に全国に同じ想いを抱いている人たちとの出会いにより、大きなうねりが起きていることを実感すると同時に、気づいている人たちが走り続けなければならないことも再確認した。今後湘南ふくしネットワークオンブズマンと、成年後見制度、地域福祉権利擁護事業そしてNPO等の新しい仕組みを、いかに重層的に地域の中に作り出していくことが出来るかが直面している大きな課題であり、そのキーパーソンには、当事者及び市民であると確信している。



西山 正子（にしやま まさこ）

鎌倉生まれ、鎌倉育ち。ルーツを辿れば新潟県。結婚してから茅ヶ崎に住むが、在住40年になる。1983年から1995年の3期12年間、茅ヶ崎市議として活動に専念。その後横浜市立大学で社会福祉論等を聴講する傍ら、NHK学園の通信教育で学び、介護福祉士、ホームヘルパー2級を取得。社会福祉の仕事をしたかったと思っていたので、福祉オンブズマンになった時は嬉しかった。

いろいろな市民運動やボランティア活動にかかわっていて、けっこう忙しいが、体を動かすことが好きで、合気道、呼吸法（気功）を習い、夫と一緒に山登りをする。

献血 182回を記録。200回を目指している。





大石 剛一郎（おおいしこういちろう）

1959年、東京都世田谷区生まれ、中学校以降は、神奈川県川崎市育ち・在住で今日に至る（しかし関西地方・中国地方が好き）。2人の女兒（小学生）の父親（子育て下手）。ノンポリ。好きなことは、スポーツ、ゲーム、パズル、ギャンブル、歩くこと、子どもと遊ぶこと。きらいなことは、遊園地などで長い時間並ぶこと、人ごみ、「皆がそうするから」という理由で動くこと、「保護してやる（あげる）」式の福祉。

今年で登録13年目の弁護士（東京弁護士会）。子どもの権利委員会（少年事件、学校事件、児童虐待など）、医療問題弁護団（医療過誤訴訟）に所属していたころ、先輩弁護士の誘いで、障害児・者人権ネットワーク、水戸アカス事件弁護団・福島事件弁護団に参加、スウェーデン・ストックホルムの福祉システム研修に参加したことがきっかけで、上田さん・高山さんの誘いで湘南ふくしネットワークオンブズマンの活動に参加。その後、白河育成園事件弁護団、愛成学園事件弁護団に参加し、アメリカ・シカゴの知的障害者権利擁護システム研修に参加したことがきっかけで、副島弁護士の誘いで知的障害者刑事弁護センターに参加。現在、浅草（レッサーパーンダ）事件弁護団に参加中。日弁連の交通事故相談員、法律扶助協会の消費者事件相談員、DVに基づく離婚訴訟に関与すること多数。

法律の仕事は後ろ向きの仕事や事務処理が多いので、このNPO法人では何とか「クリエイティブな活動」がしたい。



藤本 直也（ふじもと なおや）

鎌倉に在住してます39歳の男性です。

仕事は、福祉に全く関係ないコンピュータ関連の会社で、営業をやっています。

家族は、妻と男の子2人（小学校3年生、幼稚園年中）がいます。昨年9月に社会福祉士の通信課程を終え、今年の国家試験に合格しました。

今までは、ボランティア活動で、障害児・者の方の外出支援や、地域ケアプラザで高齢者の方にデイサービスのお手伝い等をやってきました。社会福祉で勉強したノーマライゼーションの社会の実現に少しでも寄与したく、福祉オンブズマンに応募しました。よろしく願います。

塚越 博（つかこし ひろし）

1929年、茨城県生まれ。約30年前から鎌倉・七里ガ浜に住んでいます。

食品・医薬品会社に勤めていた平凡なサラリーマンだった私は、60才の定年が目先にちらつき始めた頃、福祉のボランティアをしていた妻の生き生きした姿に強い影響を受け、福祉に関心を持つようになりました。定年になると直ぐに県立紅葉ヶ丘高等職業技術校へ入り、福祉を学んだ後、特養ホームの重度痴呆棟の現場で5年間、介護に従事しました。その後もホームヘルパーや老人ホームでのボランティアを続け、今に至っています。

2年前オンブズマンに加わり、今年は3年目に入ります。オンブズマン活動を通して多くの人と出会い、話し合う中で、私自身が力づけられ、学ぶことが多いのですが、とりわけ、自分が自分らしく生きる、自分のことは自分で決める、という人生の一番根っここのところを、もっともっと大事にしたいな、しなくてはいけないな、と強く感じています。自分のしたいことをしたいと言い、嫌なことは嫌と言う、そんな当たり前のことが当たり前にできるような環境を整える、特定の、ごく少数の人しか言いたいことが言えない、或いは言っても聴き取ってもらえない、そんな現実を変えてゆく、そのための努力を積み重ねてゆきたい、と思っています。

矢野 舜一（やの しゅんいち）

前身の湘南ふくしネットワーク・オンブズマンが結成されてから2年経過した1999年4月、知り合いの財産問題で助けて頂いたのがきっかけで、10人目のオンブズマンを委嘱されました。

考えて見れば、ずぶの素人が、いきなりお引き受けすること自体、かなり無謀な話であったように思います。66歳で宮仕えを終え「定年後をどう生きるか」に結論が出ず、休日の連続にうんざりしていた矢先のお誘いに、生来の横着さが頭をもたげ「まあ、歩きながら考えるか」とOKしてしまいました。

任期は3年。1930年生まれ。任期中に古稀を迎えることは初めから分かっていたから、1期だけと自分に言い聞かせて取り組んできました。だがこの仕事、決意だけで勤まるものではありませんでした。経験を積むほどにその難しさが身にしみます。とはいえ、70有余年の人生を生きて培った生きざまは、簡単には変えることもできません。

そこで考え方を切替えました。この3年間の貴重な経験を、任期終了後にどう活用するかを当面の課題にすることにして、ぼちぼちと日常業務に向き合っています。引き際はきれいに、と頭の中で繰り返しながら。



久保田 眞江(くぼた まさえ)

この5年間程、身内の介護で色々勉強いたしました。

知らないという事は...と過ぎ去ってから社会の仕組みを知り「そんな事も、国や福祉で援助を受ける事ができたのですか」と忙しさにかまけ、つい勉強もしなかった自分が悔やまれました。

まだ、介護で進行形の身ではありますが、趣味の旅行や手仕事だけではなく、すこしは社会参加をしたいとお仲間に入れて頂きました。

右も左も解りませんが皆様にご指導いただきながら少しでもお役にたてばと思っておりますので宜しくお願い致します。



市川 裕剛(いちかわ ひろたけ)

初めまして。市川裕剛(イチカワヒロタケ)と申します。権利擁護に強い関心を持ち、今回、オンブズマンに参加させていただきます。

現在は、東京都内の精神障害者施設で指導員をしています。福祉の現場にいて、仕事は利用者さんのためだけではなく、私にとっても大きな誇りであると感じています。

この仕事を通して、利用者さんも私も輝けるような社会作りに参加したいと思えます。よろしくお願い致します。

多田 牧(ただ まき)

みなさん、こんにちは。

このたび、新しくオンブズマンに加わりました多田です。

生まれは東京ですが、鎌倉市七里ヶ浜で育ち、現在は夫とふたりで横須賀市に住んでいます。

精神障害者地域生活支援センターの職員になって1年になりますが、その前は、高齢者の在宅介護支援センターに3年ほど勤めていました。

人の縁とはホントに不思議なもので、こうしてまた新たにみなさんとお会いできることを心から嬉しく思っています。人に言わせると、私の第一印象は「取っつきにくい」そうですが、決してこわい人ではありません・・・。趣味は、年に数回の山歩きと、茶道です。

これからどうぞよろしくお願いいたします！



福本 亮(ふくもと りょう)

1933年に生まれた私は、軍国主義下の日本で小学生時代の教育を受け、敗戦の混乱の真っ只中で中学生生活を過ごしました。

1960年から始まった日本の経済成長は、今からみれば短い循環的な不況を経ながらも奇跡とも言える高度成長を遂げた時期であり、同時にそれが私の社会活動としての企業をとりまく環境となりました。

その状況は90年半ばの私が事業から離れるまで続く事になります。

第2次世界大戦の大量殺戮(戦争には行かなかったが45年3月10日の東京大空襲を目撃している)から敗戦、そして大量生産時代の幕開けとなり大量消費の結果がもたらした地球の環境破壊というこの二十世紀を体験してきました。そして私は自己の人格がこの時代との触発のなかで形成されてきたことをしみじみ感じるがあります。

私は以前より晩年の自分のテーマとして社会福祉に関心をもっていたので、退職後2年ほど福祉関連の講義を母校で受けながら改めて自分の生きてきた時代を反芻する機会をもち、福祉活動に携わっている人々の話に参加する機会にめぐまれました。

私がこの分野でどの様な役に立てるか不明ですが、訓練と実践を通じていささかの自己改革を期しながら努力を重ねていきたいと思っています。

若山 真理子(わかやま まりこ)

1951年生まれ。

息子(19歳・目が見えなく知的障害があるが、音楽に対してはある種の才能を持っている)が育っていく中で、あたりまえの暮らしをしているだけなのに、娘を育てているときとは違う感覚がいつもありました。小さな対立や説明を繰り返しつつ、息子から私自身が学んでいきました。挫折や失望から得た少数派感覚を演じていたあの頃から、オンブズマンとして学ぶことによって、だんだん染みついた少数派になっていく。それも又楽しいと思っております。

その人が持っている障害を何とかするのではなく、障害のある状態に社会がしている状態をなんとかしたい、医療・教育・福祉・地域社会の変革を願っています。私も含めて「支援者」の価値観が健常者のままではいつまでもこの状況は変わらない。黙っていたら「イエス」と思われる。「おかしい」「違う」時には「ノー」を言わなきゃと思っています。





永峯 千尋(ながみね ちひろ)

私には、50年もの間「もう一度会えたらいいなあ」と思っている男性がいます。小学校の時のクラスメイトだったキシ君です。

がっしりした体格のキシ君は、一学年上のクラスにいたのですが、中耳炎をこじらせてしまってずっと休学、遅れて下の学年の私たちのクラスに入ってきたとのことでした。

戦後まもなくのことで、医療も不十分だった時代のことです。私たちのクラスにもどってきた彼は、まったく耳が聞こえなくなっていました。どうやら先生は、私のおせっかいやきの性格をすでに見抜かれていらしたのでしょう。キシ君と並んだ私は、勉強そっちのけで、友達のおしゃべりや、先生の話しをキシ君に伝えようと、身振り、手振り、で頑張った記憶が鮮明にあります。時には、悪ガキ共にいじめられそうになると、飛んでいって両手で彼をかばって止めに入ったことも何度かありました。

しかし、いくら私がかんばってみても、彼は不安そうな、すがりつくような目で私を見つめるばかりで、私は、彼の求めていることに少しも答えることができなかつたのでしよう。しばらくしてキシ君は専門の学校に転校してしまいました。

あれから50年、ある時、突然耳が聞こえなくなつてしまった小学生のキシ君の戸惑いの大きさ、深さは幼いながらも私の心のなかに、ずっしりと根を下ろし、やるせない思いと共に、ずっとずっとこだわり続けることになりました。

今にして思うと、進路を決める際も、結局果たせなかつたとはいえ、福祉を目指したいと思つた事も、その後福祉学習グループをたちあげたり、自閉症児の子ども達のボランティアをさせていただいたのも、あの時の「キシ君」の真剣な目なごしを理解し、なんとか答えたいとの思いがあつたためなのではないかと思うのです。

23年前に、当時の文部省が、養護学校の義務化を奨めようとしたときに、湘南地区の先生方は、全国的にも数少ないことでしたが、反対運動を展開されました。私たちも私にとっての「キシ君」が、クラスから排除されてしまうことの不自然さを訴えて、共に話し合いを重ね、どのような子どもも受け止めることの共通理解を深められたことは、とても得がたいことでした。

振り返って見ると、幼い頃に、キシ君に出会つたお陰で、彼の表情の奥にしまいこまれたものを知りたいと思うがために、なんと多くの人に出会い、

たくさんの人の人生を見させていただいたことだろう。還暦を迎えて、彼に出会えたら、今だからこそ私の歩んできたみちのりを伝えることができるのではないかと思うのです。あなたによって豊かに生きてこられた人生だったから....。



佐川 美智子(さがわ みちこ)

1939年東京生れ。茅ヶ崎の団地に36年間在住。地域の住民活動のいろいろなものに参加。子ども5人、孫7人。

1980年~1995年、学習支援のための家庭塾で自閉症児や多動児、学習困難の子どもたち、不登校の子どもたちと交流。

1990年~2000年、自分と夫の老親(94才、91才、85才、86才で没)の介護で病院、施設、介護サービス等を経験。



大和 佳子(やまと よしこ)

子育て、義母、兄、母の看病を通して、家族福祉のあり方、親子の絆・夫婦の絆・兄弟の絆の大切さを知りました。また、少子高齢化社会や核家族化が進むなかで、自助努力だけでは解決できない問題も実感しました。私は周囲に支えられ育児看病を終える事が出来ましたが、世の中では十分に育児看病に専念できない人が多いのではないかと思います。40歳を過ぎ機会に恵まれ学ぶ事ができ、福祉活動を通して地域社会に何か貢献できないかと考えるようになりました。また育児の経験を生かし、働く若いお母さん達や産前産後のお母さん達の手助けになればと保育サポートをしています。

こんな私が、オンブズマンを引き受けていいのだろうか、当初不安を持っておりましたが、オンブズマン活動を通して、たくさんの方々と出会い、たくさんの学びを得る事が出来ました。日々学習の一年でした。

気分転換を兼ね時折、車に布団を積み込んで、四季折々の自然を満喫する旅をしています。こんな私です。宜しくお願い致します。



押田 有美 (おしだ ゆみ)

1980年6月30日生まれ かに座・A型

現在、大学で社会福祉の勉強をしています。ノーマライゼーションと、地域福祉に関心があります。障害や病気がどんなに重くとも、年をとって死が迫っていても、人間は、「ふつうの生活」を送る「権利」があり、社会はそれを支える「責任」があるというノーマライゼーションの思想を地域の中で確立していくために、私自身がどのように行動していけばいいのかを考えています。そんな想いの中から、湘南ふくしネットワークオンブズマンの活動にボランティアとして参加してみようと思いました。

小田原生まれの小田原育ち。中学生までは、ソフトボールに汗を流していました。主に、キャッチャーのポジションを守っていたせいか、声はでかいと思います。趣味は、旅行をすること。友達としゃべること。へたくそなギターの弾き語り。長所は、体が大きいので人に覚えてもらうのが早いこと。声がでかいこと。短所は、体が大きいので何もしていないのに目立ってしまうこと。声がでかいこと。

まだ、22歳という「わかもの」ではありますが、若さでがんばりたいと思います。

江崎 康子 (えざき やすこ)

1948年、神奈川県鎌倉市生れ、結婚をして藤沢に在住。夫、成人している息子2人との4人暮らし。趣味読書。が、ここ8年読書三昧できず欲求不満のみです。やるべき事、やりたい事が山ほどあるのに仕事が遅いので時間が欲しいと切実に思っています。パソコン歴3年目、苦しみから楽しみに変わってきました。日差しを浴びて家族の布団を干している時に幸せを感じます。最近ゴンチチのギターとゴスペラーズの歌声にはまっています。

長男(28歳)が自閉症という障害を持って生れてきたため、悪戦苦闘の毎日でしたが、夫と共にエピソードを本にまとめて今年再出版しました。本の編集をしながら障害者を取り巻く福祉社会の急速な変化を改めて実感しました。不満はあっても確実に進んでいます。

息子が親離れを始めた時期から親の会運動に手を染め、県親の会連合会の代表を経て、現在広報部長。自閉症についての知識を広め、理解を訴え、より暮らしやすい社会の実現を目指して活動しています。その中でオンブズマン活動に出会いました。NPO法人化されたこの組織の中で役割を果たしながら、自分自身を高め運動を広く深くして、微力ではあっても時代を推し進める力になっていきたいと考えています。よろしくをお願いします。

山下 和男 (やました かずお)

Sネットのオンブズマンとして4年が経ちました。いままで無我夢中、暗中模索という状況でした。当初自分の職業(司法書士)がどのように福祉分野で権利擁護に役立つのか疑問でした。実はまだその疑問は続いていますし、知らないことも相変わらず多く毎日が不安です。ただ日常の活動にあたり、自分のなすべき仕事(活動は)障害者・高齢者の権利擁護であって、施設のためのオンブズマンではないというスタンスを大事にしたいと考えるようになりました。あたりまえのことですが、慣れない福祉分野の中で活動をしようとするとき、なぜかこの点を意識していなかったり、見失っていたりすることがありました。(オンブズマン活動費も施設から出ているし・・・)とっても俗っぽいですが、個人事業主である自分はお客様の満足度には気を使います。時には採算を度外視したりお客様の要望があれば休日も関係なく仕事を入れたりしています。お客様の満足度が簡単にいえば収入に直結するからです。福祉分野に関係されておる方々に対してこう書くと、とっても恥ずかしいですが、敢えて平成14年度はこの俗っぽさを自分のセールスポイントとして活動していこうと思います。

水野 翔子 (みずの しょうこ)

1945年・北京生まれ。平成14年は、私や私の家族にとって、大変な年となりました。一人暮らしの80歳になる母の骨折(高齢者問題)・私の職場(福祉専門学校)の現状も厳しくなり、私は大変な時代に生きていると嘆息しながら日々生活しております。その意味では、利用者の方と同じ時代を生きていることを痛感しています。また活動の中で利用者の方達の力強いパワーに感動すると共に、勇気づけられたりすることもあります。その反面どれだけ利用者の権利擁護を推し進め、利用者に戻していかれたかと深く反省しています。

オンブズマン活動に意欲を燃やし続けて6年目を迎えますが、しかし、壁は厚く、無力感に押しつぶされることもしばしばです。そのような中、継続できたのは、個性的ですばらしい方達との出会いによるところが大きいと思っています。

NPO法人になり多くの課題を抱えることになりましたが、仲間も増え、また県内のオンブズマンも100名にもなり心強い限りです。微力ではありますが利用者の権利擁護に向かって前進していきたいと思っていますのでどうぞよろしくをお願いします。



粟谷 弘海（あわたに ひろみ）

こんにちは。福祉オンブズマンになって今年で4年目に入ります。どれだけの成果を上げられたのか、振り返ると微々たるものしか.....。

でも、15名のオンブズマンの力で一步一步前進していると思います。小さな力もみんなで合わせれば大きな力へ、また、運動のうねりは全国に広がっていきます。

障害者や高齢者の権利擁護の問題が大きくクローズアップされている中、福祉現場でここ数年、さまざまな権利擁護の取り組みがなされています。わたし自身は知的障害者入所更生施設や身体障害者療護施設を担当していますが、利用者の方々から、わたし自身多くのことを学びます。利用者の権利擁護に対する意識が高まってきていることを肌で感じています。これからもよろしく願いいたします。

川越智子（かわごえ ともこ）

1966年、東京都大田区生まれ。現在相模原市在住のフリーライターです。



2001年7月に児童虐待をテーマにした「またあの日がはじまる 児童虐待の真実」(ネコパブリッシング刊)を執筆。2002年6月には高齢者虐待をテーマにした「終のすみかを探して 虐げられる老人たち」(全日出版刊)を出版しました。

今後も社会問題をテーマに執筆、出版していきたいと思っています。

オンブズマン活動に参加させていただいたのは、これらの本のため取材をする中で「人権ってなんだろう?」と強く疑問を感じたためです。机上で反対を唱えるだけでなく、実際に活動に携わってみたいと思いました。まだよくわからないことだらけですが、せいいっぱい取り組ませていただきたいと思います。

相川 裕（あいかわ ゆたか）

弁護士（今年で10年目です）。東京弁護士会に所属していますが、住まいは横浜です。

弁護士としては、一般の民事事件の代理人活動の他、刑事事件、少年事件、外国人の事件、そして障害を持つ方の事件にも関わっています。弁護士会では、昨年度の日弁連の人権擁護大会で発表した、障害者差別禁止法要綱（実行委員会試案）の作成にも関わりました。知的障害者の権利擁護システムに関心を持ち、スウェーデンに研修旅行に行ったことがきっかけで、湘南ふくしネットワークのオンブズマンの一人になりました。

これまでの担当施設は、カトリアホーム、軽費鎌倉静養館、翔の会地域作業所（グリーンクラス等）、特別養護老人ホーム鎌倉静養館などです。

自分の専門性を活かしつつ、一つ一つの相談に謙虚かつ元気に向き合っていきたいと思っています。そして、そこから、現場に根ざした権利擁護（エンパワメント）活動のあり方を模索していきたいと考えています。

賛助会員入会のお願い

私たち「湘南ふくしネットワークオンブズマン」は、施設や地域において福祉サービスを利用または必要とする人たちの権利を守り、その人が決めたその人らしい暮らしを実現するために活動しています。そのためには、地域の方たちの協力が必要です。私たちの活動をご理解くださり、ご支援くださる方には、賛助会員としてご入会くださるようお願い申し上げます。

賛助会員会費・地域のみなさま 年額一口1000円・法人のみなさま 年額一口5000円 ご入会いただきました方には、会員証、会報などをお送りします。ご入会の方法・郵便振替振込書により下記口座へ会費をお振り込みください。

郵便振替口座番号 00210-9-75496 口座名義人 NPO法人 Sネットワークオンブズマン（特定非営利活動法人湘南ふくしネットワークオンブズマンの略称です）

賛助会員にご参加くださった方（敬称略・順不同）【法人会員】神奈川県青年司法書士協議会、県央東地区オンブズパーソンネットワーク、NPO法人野の花ネットワーク、訪問介護サービス・居宅介護支援事業者 湘南ひまわり【個人会員】（鎌倉市）猪巻敏夫、富田順一、林美代子、山崎信男、（平塚市）荒木一男、大蔵律子、（茅ヶ崎市）相田敬子、阿彦君江、大木礼子、大畑良江、加藤勇、鐘ヶ江洋子、金子庸子、薩摩章子、清水洋一、重岡健司、高橋登女恵、寺田富久子、端山輝男、檜垣利子、松村市子、山永妙子、渡邊保子、藁科裕子、勢渡澄江、高橋厚子、田部許子、中嶋公子、新倉佳子、羽切信夫、平野三千代、松本順子、山本奈央、中西拓子、長谷川晴世、梅田和彦（横浜市）大木佳美、竹口生子、深野千恵子（横須賀市）堀 俊、荻野谷洋子（藤沢市）小川桂子、金成和子、矢嶋爽（逗子市）宮本幸太、宮本すみ子（城山町）中谷正代（東京都）長谷川恵子、池田恵利子、志田徳子、持館浩、持館すが子（静岡県）森光博（千葉県）田丸洋介（群馬県）金子房江、寺内玉枝

